

第8期(2021-2022) FD 推進委員会 中間報告

FD 推進委員会

【活動経過】※第1期～第3期までは記載省略

第4期(2014年度～2015年度)

2014年4月	第4期 重点的課題 1. 授業改善のための学生アンケートの改善 2. 授業改善のための学生アンケートの集計結果の公表および活用
2014年7～8月	授業改善のための学生アンケート(前期科目) 全学実施
2014年11月	第5回よりよい学びのための学生懇話会(学部生対象) 実施
2014年11月	FD教職員ワークショップ実施(「白百合女子大学における学修支援 Part II ～卒業するまでに身につけてもらいたいこと～」)
2015年1月	授業改善のための学生アンケート(通年・後期科目) 全学実施
2015年2月	2011-2013「授業改善のための学生アンケート」結果報告書 Web 公表 2014 前期「授業改善のための学生アンケート」結果報告書 Web 公表
2015年6月	2014 後期「授業改善のための学生アンケート」結果報告書 Web 公表
2015年7～8月	授業改善のための学生アンケート(前期科目) 全学実施
2015年10月	第4回よりよい学びのための院生懇話会(大学院生対象・全専攻合同) 実施
2015年10月	FD教職員ワークショップ実施(「白百合女子大学における学修支援 Part III ～アクティブラーニング～」全2回)
2016年1月	2015 前期「授業改善のための学生アンケート」結果報告書 Web 公表
2016年1月	授業改善のための学生アンケート(通年・後期科目) 全学実施
2016年6月	2015 後期「授業改善のための学生アンケート」結果報告書 Web 公表

第5期(2016年度～2017年度)

2016年4月	第5期 重点的課題 授業改善のための学生アンケートの再点検・再検討
2016年7～8月	授業改善のための学生アンケート(前期科目) 全学実施 授業改善のための学生アンケートについての教員アンケート全学実施
2016年11月	第6回よりよい学びのための学生懇話会(学部生対象) 実施
2017年1月	授業改善のための学生アンケート(通年・後期科目) 全学実施
2017年6月	2016 前期「授業改善のための学生アンケート」結果報告書 Web 公表 2016 後期「授業改善のための学生アンケート」結果報告書 Web 公表 FD教職員ワークショップ実施「授業運営の現状と課題について」*1

- 2017年7月 授業改善のための学生アンケート（前期科目）全学実施
- 2017年8～10月 2017 前期授業改善のための学生アンケート（前期科目）顕彰授業表彰 および
顕彰授業における工夫 Web 公表 *2
- 2017年10月 第5回よりよい学びのための院生懇話会（大学院生対象・全専攻合同）実施
- 2018年1月 授業改善のための学生アンケート（通年・後期科目）全学実施
- 2018年4～5月 2017 後期授業改善のための学生アンケート（通年・後期科目）顕彰授業表彰 お
よび 顕彰授業における工夫 Web 公表 *2

平成 29 年度私立大学等改革総合支援事業 タイプ 1 教育の質的転換

*1 申請項目 10 『FD 実施のための組織の設置及び教員の参加状況』 対応

*2 申請項目 8 『学生による授業評価結果の活用』 対応

第 6 期（2018 年度～2019 年度）

- 2018年4月 第 6 期 重点的課題
授業改善のための学生アンケートの再点検・再検討
- 2018年7月 FD 講演会実施（「大学生の発達障害とその対応方法について」五十嵐一枝先生）
- 2018年9月 2017 前期「授業改善のための学生アンケート」結果報告書 Web 公表
2017 後期「授業改善のための学生アンケート」結果報告書 Web 公表
- 2018年7～8月 授業改善のための学生アンケート（前期科目）全学実施
- 2018年10月 2018 前期授業改善のための学生アンケート（前期科目）顕彰授業表彰 および
顕彰授業における工夫 Web 公表
第 7 回よりよい学びのための学生懇話会（学部生対象）実施
- 2019年1月 授業改善のための学生アンケート（通年・後期科目）全学実施
- 2019年4～5月 2018 後期授業改善のための学生アンケート（通年・後期科目）顕彰授業表彰 お
よび 顕彰授業における工夫 Web 公表
- 2019年7月 授業改善のための学生アンケート（前期科目）全学実施
FD 教職員講演会実施「アクティブ・ラーニングへの取り組みについて」*1
- 2019年10月 第 6 回よりよい学びのための院生懇話会（大学院生対象・全専攻合同）実施
2018 前期「授業改善のための学生アンケート」結果報告書 Web 公表
2018 後期「授業改善のための学生アンケート」結果報告書 Web 公表
- 2019年12月 授業改善のための学生アンケート（前期科目）顕彰授業 および 顕彰授業にお
ける工夫 Web 公表 *2
- 2020年1月 授業改善のための学生アンケート（通年・後期科目）全学実施
- 2020年6月 授業改善のための学生アンケート（通年・後期科目）顕彰授業 および 顕彰授
業における工夫 Web 公表 *2

*1、2 令和元年度 教育の質に係る客観的指標調査票 に対応

第7期（2020年度）

2021年度より学内委員の任期が2年となる。今期は特別に1年として報告をする。

2020年4月	第7期 重点的課題 授業改善のための学生アンケートの再点検・再検討
2020年6月	授業改善のための学生アンケート（「遠隔授業に関する状況調査アンケート」） 全学実施 FD講演会実施（学内FDシンポジウム「よりよい遠隔授業の実践に向けて」）
2020年7月	2020年度前期「遠隔授業に関する状況調査アンケート」結果Web公表
2020年10月	授業改善のための学生アンケート（後期・通年科目）1回目 全学実施 FD（授業改善）の取り組みHP「教育の特色」へ掲載
2021年12月	よりよい学びのための学生懇話会（学部生対象）実施
2021年1月	授業改善のための学生アンケート（後期・通年科目）2回目 全学実施
2021年1月	学修支援ツール(LMS)「manaba course」概要説明会（教員用）実施
2021年3月	学修支援ツール（LMS）「manaba course」教職員研修会（合同）実施

第8期（2021～2022年度）

2021年4月	第8期 重点的課題 授業改善のための学生アンケートの再点検・再検討
2021年6月	FD講演会実施（「発達障害の理解と対応」宮本信也先生）
2021年7月	授業改善のための学生アンケート（前期科目）全学実施
2021年11月	SD講演会参加（「ハラスメント・防止対策のための教職員向けオンライン講演会」 主催：ハラスメント防止・対策委員会）
2021年11月	2021前期授業改善のための学生アンケート（前期科目）顕彰授業表彰 および 顕彰授業における工夫Web公表
2021年12月	よりよい学びのための学生懇話会（学部生対象）
2022年1月	授業改善のための学生アンケート（後期・通年科目）全学実施
2022年6月	2021後期授業改善のための学生アンケート（通年・後期科目）顕彰授業表彰 および 顕彰授業における工夫Web公表

【2021年度 活動報告～第8期1年目～】

I. 授業改善のための学生アンケート（学部／大学院）

経年比較のため前年度と同じ質問項目（一部文言変更）、形態で実施し、集計結果は各授業担当教員へフィードバックをした。アンケート結果の全体的な傾向と担当教員およびFD推進委員会から学生に向けてのメッセージを掲載した報告書は以下HPにて公表した。

(<https://www.shirayuri.ac.jp/guide/financial/index.html>)

また、2017 年度よりアンケート結果を活用した顕彰制度を導入しており、授業の優れた点を全学的に共有した。個々の授業への具体的な授業改善のヒントを提供するとともに、よりよい授業を作りあげる機運を高めていくことになった。詳細は添付資料 1 のとおり。

前期 2021 年 7 月 1 日（木）～ 7 月 31 日（水） 実施科目数：568 科目

後期 2022 年 1 月 11 日（火）～ 1 月 31 日（月） 実施科目数：700 科目

II. よりよい学びのための学部生懇話会（学部生対象）

今年度はコロナ感染対策をとったうえで、学部生を対象に以下 2 点をテーマとして実施した。

1. 授業や大学生活で困った時、相談できる人・場所はあるか。相談しやすい場所・雰囲気を作るためにはどうすればよいか。
2. コロナ禍／後の大学はオンライン教育をどのように取り入れたらよいか。

学生も事前に意見を考え、積極的に参加していた。学科・学年を超えた学生同士の交流の場としても貴重な機会となった。詳細は添付資料 2 のとおり。

実施日時 : 2021 年 12 月 3 日（金）12:10～12:55

参加者数 : 学部生 15 名、教員 3 名、職員 3 名

III. 学内 FD 講演会「発達障害の理解と対応」

近年「発達障害」の傾向を持つ学生の入学が増加しており、今年度ウェルネスセンターに支援を申請する学生の多くがその傾向にあることから、どのような特徴を持っているのか、正しい理解と適切な対応に繋げるため、ウェルネスセンターと共同で開催した。詳細は添付資料 3 のとおり。

実施日時 : 2021 年 6 月 14 日（月）16:30～18:00

テ ー マ : 発達障害の理解と対応について

参加者数 : 専任教員 80 名 ※専任教員参加率 100%*（サバティカル・休職者除く）

* 令和 3 年度 私立大学等改革総合支援事業 に対応する。

ほかに「IR 導入の経緯及び現状・課題についての研修会」（学長室主催）が FD の一環として 2021 年 7 月 26 日（月）に開催され、海老根委員長が出席した。また、ハラスメント防止・対策委員会主催の「ハラスメント・防止対策のための教職員向けオンライン講演会」は教員 SD の研修会として位置づけ教員へ参加するよう周知した。

以上

「授業改善のための学生アンケート」2021 年度前期 顕彰授業における工夫

2022 年 2 月 21 日

白百合女子大学 FD 推進委員会

2021 年度前期「授業改善のための学生アンケート」の顕彰授業における工夫をご紹介します。授業のあり方は授業の数だけありますが、顕彰された授業における工夫を知ることにより、よりよい学びのためのヒントが得られる機会になればと願っています。

【参考】顕彰の対象となったアンケート項目は以下の 7 項目です。

- Q3 この授業に主体的に取り組むことができたと思いますか。
- Q4 この授業の内容を十分に習得できたと思いますか。
- Q7 教員の説明の仕方はわかりやすかったですか。
- Q8 教科書や配付資料など、教材は適切だったと思いますか。
- Q11 学生の質問や相談に対して、教員は適切に対応していたと思いますか。
- Q13 この授業の目的や到達目標を十分に理解できましたか。
- Q14 この授業の内容に興味を持つことができましたか。

少人数部門

「フランス語実践研究 A」 高野 優（文学部フランス語フランス文学科） 2021 金 3 前

この授業は出版を想定した〈実践的な翻訳〉を教える授業です。学部で学生の皆さんに翻訳を教える場合、難しい問題がふたつあります。

1) 語学のレベルが翻訳をするのに十分であるとは言えないこと。翻訳は語学が基本ですので、原文の 9 割くらいは語学的にきちんと読む必要がありますが、よくできる方でも、なかなかそこまではいきません。その結果、90 分の授業の半分以上の時間が語学的説明に費やされてしまう恐れがあります。けれども、翻訳をするには、語学的な解釈をもとに文脈的な解釈を行い、解釈した内容をそれにふさわしい日本語で表現する必要があります。したがって、授業では文脈的な解釈や日本語の表現にも時間を割きたいのですが、語学的な説明で終わってしまうと、その時間がとれません。

2) 学生の皆さんは、翻訳の初学者ですので、語学的な訳文をつくりがちです。つまり、直訳的な訳文になってしまいがちです。また、日本語として自然な訳文を目指す場合も、辞書の訳語や原文の構文から十分離れることができず、結局はフランス語を日本語に訳すだけの翻訳になってしまいます。けれども、出版を前提とした翻訳では、そうしたいわば語学的な翻訳ではなく、原文で書かれた内容を日本語で伝える翻訳が求められます。フランス語を訳すのではなく、フランス語で書かれた内容を訳す——作品を訳すのです。その点をどうやって学生の皆さん伝えるか、それが問題です。

ということで、授業では、1) の問題を解決するために、あらかじめテキストで語学的な解説を行い、授業でも翻訳をする前に、語学的な解説と、ある程度、文脈にまで踏みこんだ解説をして、学生の皆さんが訳文をつくる時点で、原文の内容がほぼ頭に入っている状態になることを目指しました。翻訳の全工程を 10 とした時、0 からではなく、5 からやってもらう感じです。

2) の問題を解決するためには、児童向けの物語をテキストにして、そこに登場するキャラクターが実際にイメージできるように、ぬいぐるみ等の人形を使いました。物語のなかでは、登場人物たちがさまざまな目的、感情を持ちながら、動いたり、話したりします。作品を創るということは、その人物たちが生きている世界に読者を連れてくるということで、それは翻訳でも変わりありません。そのためには訳者がまずその世界に入りこむ必要がありますが、人形を使えば、学生の皆さんが登場人物や物語の世界を具体的にイメージできるようになり――その結果、フランス語を日本語に訳すのではなく（つまり、言葉から言葉に訳すのではなく）、フランス語で書かれた〈物語の世界〉で起きていることを日本語で伝えることができるのではないかと考えました。

また、翻訳の授業の半分は全員に向けての解説ですが、残りの半分はいただいた訳文をもとにマンツーマンで指導することなので、訳文はすべて添削し、コメントを添えて、お返しするようにしました。

最後にこの授業は出版を想定した〈実践的な翻訳〉の授業ですので、学生の皆さんの訳文を小冊子にまとめることにしました。といっても、翻訳に対する興味や意欲には差があります。そこで、全文を訳した方は個人訳の小冊子をつくり、毎回の担当課題だけを訳した方は、ほかの方と併せて、グループ訳の小冊子をつくることにしました。

多人数部門

「ビジネスナーとホビ° 列テ演習」 島田 由香（文学部英語英文学科） 2021 水2 前

この度は顕彰授業に選んでいただき光栄に存じます。

今年度前期は、対面から遠隔授業、また試験は対面にと授業形態が目まぐるしく変わった学期でした。遠隔授業で工夫した点は、皆が参加していることを互いに感じあえるようにした点です。学生に「嫌な人や環境的に難しい人を除いて、良かったらカメラをオンにしてください」と呼びかけました。Zoomのメリットとしては、参加者全員が同じ大きさで画面に表示されるので、皆で参加している気持ちになり、インタラクティブな場づくりができました。また、「ブレイクアウトルーム」を活用して、小グループに分かれて話し合いができることも大きかったと思います。

教員としては、Zoom リアルタイムで行うメリットを生かし、ラジオパーソナリティーや You tube のライブをする感覚でチャットに学生に書き込みを随時してもらったりとライブ感を大切にして、繋がっている感覚を大事にしました。

遠隔、対面ともに、工夫したことは、90分授業の初めの10分間を前授業のフィードバックをクイズ形式にしました。このことは復習になっていると考えられますと同時に授業の導入として、学生の授業に対する興味・関心・モチベーションを向上させるために最も重要な時間となったと思います。残りの時間は本時間の新しい単元の授業を実施しましたがその際「わかりやすい言葉で講義する」「身近な例を使う」「学生が興味を持ち、新しい発見ができる授業」などを心掛けました。学生が学問に興味を持ち、「もっと詳しく勉強したい」と学習意欲が湧くような授業を心掛けました。

積極的に授業に参加してくれた履修生たちにこの場をお借りして御礼申し上げます。

「授業改善のための学生アンケート」2021 年度後期 顕彰授業における工夫

2022 年 6 月 9 日

白百合女子大学 FD 推進委員会

2021 年度後期「授業改善のための学生アンケート」の顕彰授業における工夫をご紹介します。授業のあり方は授業の数だけありますが、顕彰された授業における工夫を知ることにより、よりよい学びのためのヒントが得られる機会になればと願っています。

【参考】 顕彰の対象となったアンケート項目は以下の 7 項目です。

- Q3 この授業に主体的に取り組むことができたと思いますか。
- Q4 この授業の内容を十分に習得できたと思いますか。
- Q7 教員の説明の仕方はわかりやすかったですか。
- Q8 教科書や配付資料など、教材は適切だったと思いますか。
- Q11 学生の質問や相談に対して、教員は適切に対応していたと思いますか。
- Q13 この授業の目的や到達目標を十分に理解できましたか。
- Q14 この授業の内容に興味を持つことができましたか。

少人数部門

「領域言葉」 土橋 久美子（人間総合学部初等教育学科） 2021 金 3 後

「領域言葉」は、幼児教育・保育を学ぶ学生が履修する授業です。絵本や紙芝居、パネルシアター、ペープサートなどの児童文化財の特徴や活用方法を学び、演習（保育実践）を通して、保育者の役割などについても理解を深めていきます。保育の中で子どもたちと楽しむ教材を自ら作り出していく、学生の主体性が求められる授業です。保育者を目指す学生を育てる使命も担っているので、授業の取り組み態度や課題提出について、他の科目よりも厳しい授業だと思います。学生一人ひとりがその厳しさに向き合い、演習を通して達成感や満足感を得ることが出来るよう、学生との対話を常に持つことを意識していました。

コロナ禍の演習など様々な制約がある中で、どのように学生とコミュニケーションを取っていくのか、常に学生の取り組み方をイメージしながら授業展開を考え進めていきました。紙芝居を演じる保育実践では、学生同士の間隔に気をつけながら演習を行い、良かったところや課題点などお互いに意見を交換し合いました。ペープサートや牛乳パックの人形制作では、友達と一緒に取り組むことで多くの刺激が生まれ、制作意欲につながったと感じています。

授業内で使用したパワーポイントは、毎回 manaba course のコースコンテンツに掲示し、各自で復習できるようにしました。1 月、遠隔授業となった際にも、レポートサイトで教員からコメントを返すなど manaba course を活用しました。残念だったことは、この授業の集大成といえる「なんでも BOX 実践発表」が遠隔 Zoom 授業となってしまったことですが、学生の自宅にある身近なものをパネル板にして、作成した「なんでも BOX」を画面上で発表することができました。Zoom 画面いっぱい、学生達の「なんでも BOX」と満足そうな顔が並んだ光景は今でも目に浮かびます。

幼児教育・保育における「領域言葉」のねらいとして、「言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」とあります。この授業を通して、学生自身の言葉に対する感覚や表現する力がより一層磨かれることを期待しています。「この授業を受講して、自分が将来子どもの前に立っている姿を想像することができた」「子どもが言葉を育むにあたってどんな保育方法があるのか、どんな道具を使うのか、その道具をどう利用するのかなど具体的な想像ができた」、学生からの感想です。「想像、イメージする」これは、教員にも必要なことだと思っています。これからも学生の取り組む姿を想像しながら、授業内容を検討し展開していきたいと思っています。

多人数部門

「保育体験Ⅰ」 土橋 久美子、目良 秋子、椎橋 げんき (人間総合学部初等教育学科)

2021 火4・5 後

「保育体験Ⅰ」は、初等教育学科幼児教育コース1年生が受講する授業です。子どもと直接触れ合う体験を通して乳幼児期の子どもの姿を知り、保育士の職務や保育所という場について理解を深めることをねらいとしています。本学学生の学びのために、調布市内の8つの保育所の協力を得て、2021年度後期は、一人3回の保育体験を行いました。この授業では、保育体験後のレポート作成や大学での振り返り授業の参加と、学生自身が主体的に取り組むことが必須となっています。コロナ禍での保育体験ということで、学生自身の体調管理も求められました。今回、学生からのアンケート結果から高い評価を得る事ができたことは、コロナ禍の中でも受け入れてくださった保育所の先生方が温かく見守り、時に優しくアドバイスをしてくださったおかげだと思っています。

保育所での保育体験実施前には、対面とZoomでの事前指導を丁寧に行いました。「保育体験のしおり」を用い、保育体験の進め方やレポート作成について説明を行い、前期保育体験を受講した2年生との意見交換も行いました。先輩からの話を聞いて、初めての保育体験に不安を感じていた学生もホッとしたようでした。

この授業は3名の教員で担当しています。事前指導や振り返り授業など、それぞれ分担し担当しました。manaba course を使っての体験レポート個別コメントや個別相談など、学生の気持ちに寄り添いサポートすることに努めました。保育所での体験を通して、多くの学生が学内での理論的学びとの違いなどを実感することが出来たようです。大学での学びと現場の学びとの往還は、この授業の目指すところです。

「実際に園の雰囲気を感じることができた」「レポートにコメントを返してもらえたので次回につなげることができた」「本番の実習前に一度保育所に行くことができるのは良い」など、前向きな感想が多かった点も学生自身が主体的に授業に取り組んだ結果だと感じています。コロナ禍の保育体験ということで、学生に負担をかけてしまったことも多かったと思います。今後も学生自身の保育に対しての具体的なイメージを持ちながら理論的学びを深められるよう、改善できるところを検討しながら教員同士連携を取り進めていきたいと思っています。

2021 年度学生懇話会報告書

2021 年 12 月 16 日

FD 推進委員会 学生懇話会 WG (大槻、菊地、山梨)

1. 概要

日 時：2021 年 12 月 3 日 (金)

12:10~12:55

参加者：学生 15 名、教員 3 名 (海老根、
菊地、山梨)、職員 3 名 (大槻、館
岡、松下)

場 所：11 号館 3 階クララホール

英語英文学科	5
2年生	3
3年生	2
国語国文学科	4
2年生	3
4年生	1
児童文化学科	3
2年生	3
発達心理学科	2
2年生	1
3年生	1
仏語仏文学科	1
4年生	1
総計	15

2. スケジュール

12:00~ 開場

12:10~ 趣旨・スケジュール説明

12:15~ グループセッション

12:45~ まとめ (グループ発表)

12:55 終了

3. テーマ

- ① 授業や大学生活で困ったとき、相談できる人・場所はありますか？相談しやすい場所・雰囲気を作るためにはどうすればいいと思いますか
- ② コロナ禍／後の大学はオンライン教育をどのように取り入れたらよいと思いますか

4. 報告

テーマ①については、想定していた通り、2年生(2020年度入学生)とそれ以外の学年(3・4年生)の間に大きな違いが認められた。初年次に対面の経験がほぼない2年生からは、アドバイザーを知らない、知っていてもコミュニケーションの取り方に戸惑い、十分に活用できなかった様子が見える。しかしながら個別の意見を鑑みるに、これらの問題はコロナ禍において対面の機会が持てなかったが故に生じたものであるというよりも、大学として新入生に対して適切な方法で必要な情報を提供できていないのではないかという点から捉えなおすべき問題なのではないかと推察される。そのうえで、大学に慣れていない初年次生が相談しやすい環境を大学として考えていくことが重要である。教職員のみならず

上級生のカも借りることで、初年次生がより相談しやすい状況が作り出せるのではないだろうか。

テーマ②についての学生の意見で傾聴すべきは、科目の特性によって対面授業とオンライン授業とを振り分けるという考え方である。図らずも導入された遠隔授業（同期型/非同期型）ではあったが、その学修効果の点からオンラインでの実施が望まれる科目も存在することは広く認識されているところだからである。また、授業ごとに用いられるツールが異なる状況に負担を感じる学生がいることもわかった。オンラインであるか否かにかかわらず、LMS（Learning Management System）は大学教育においてもいまや必須のツールとなりつつある。その適切な利用を、大学として教員側に促す取り組みが望まれる。

当初WGが抱いていた、学生の積極的な参加は見込まれないのではないかという不安は、参加申し込み締切日を待つことなく設定人数を上回った申し込み人数によって見事に裏切られた。大学は学びそのものを主体的に楽しむ人々からなる共同体である、とされる。その共同体の重要な構成員である学生たちが、主体的に大学生活を楽しむことができるよう、その不安を払しょくできる態勢を整える必要があるだろう。

5. 参考資料——学生の意見（カッコ内は学年を示す。不明の場合あり）

テーマ①

<相談できる人・場所はありますか>

➤ アドバイザー

- ◆ アドバイザーが誰か知らない（2）
- ◆ アドバイザーは入学時に知らされたが、特に働きかけはなく、どのようなことをどのように相談するのかわからなかった（2）
- ◆ 1年時のアドバイザーがネイティブの方だと、自分の語学力の問題もありとても相談しようという気にならず、どうしても躊躇してしまう。他の授業の先生に質問をするしかなかった。少なくとも、1年生時のアドバイザーは日本人の先生だと助かる。（2）
- ◆ 何故か先生と面談する機会が設定されたが、面接が途中で切れて曖昧なまま終わってしまった。後で友達から聞いたらアドバイザーとの面談だったらしく、その先生が自分のアドバイザーだったことを知った。1年時はメールが使いづらかった。今でもネイティブの先生にメールをするのには文法が気になり気後れする。事務部署の守備範囲が良くわからない。友人からある部署は対応が悪かったと聞くと利用しづらくなる。（2）
- ◆ アドバイザーとの面談時間をきちんと作って欲しい。また、学生が匿名で相談や質問ができ、質問内容が共有できる質問箱のようなもの、名前を出さなくてよければ相談もし易い。（2）

- ◆ アドバイザーは授業担当者のため顔はわかるが、話したことがない状況。大学のルールや履修のことを相談したかったが、相談しにくかった。入学後 SNS で知り合った友人もアドバイザーへ相談したことがないようだ。(2)
- ◆ アドバイザーとは個別相談やアドバイザー相談会へは参加して少し話せた。授業担当教員の方が身近で話しやすかった。教員側から発信してくださると話しやすい。(2)
- ◆ アドバイザーは入門セミナーの先生と案内されていたので、どの先生かすぐにわかったが、自らすすんで話す機会はなかった。遠隔ということもあり話しかけやすい環境ではなかった。困りごとがあれば、友人に相談したり、教務課に問い合わせていた。(2)
- ◆ 1年は対面、2年は遠隔。1年前期には、アドバイザーと学生5名ずつで懇話の機会があったが、後期はなかった。アドバイザー以外の先生ともつながりができていたので、何かあれば相談しやすい先生に相談していた。(3)
- ◆ ゼミの先生とアドバイザーが異なり関係する先生が多くて不便に感じた。(4)

➤ 教員

- ◆ 先生の連絡先は、どこを見たらよいか不明だった(2・4)
- ◆ 遠隔授業において、メールアドレスを公開していない先生がいらして困った。対面授業であれば友人に伝言してもらえたが、遠隔では難しかった。(2)
- ◆ 遠隔授業において、教員へのメールで問い合わせをしたり、課題提出をしたりすることがあったが、返信がないと、届いているか、自分が何か間違えをしていないか、と不安が続いた。対面になっても、授業外でどのように連絡を取ったらよいかわからない授業がある。授業担当教員のメールアドレスは公表してほしい。(2)
- ◆ 学修や留学に関すること等は授業の先生に相談。対面だと授業終わり等に相談できるがオンラインだとそういった相談をしづらい。白百合は少人数のイメージがあるがオンラインだと大人数も少人数も関係が無く少人数の良さを感じない。(4)

➤ 学科研究室

- ◆ 自分はまず研究室に行ってなんでも聞き相談できていた(4)
- ◆ 用事がなければ研究室へはなかなか足を運ばない。
- ◆ (学会に入っていることから)研究室をよく利用するが、友人はそうでもないようだ。

<相談するという自体の困難さ・距離感>

- ◆ 学生生活上の相談はどこにすれば良いのかわからない(2)
- ◆ どういったことをどの程度相談してよいか不明(2)
- ◆ オンラインから大学生活がはじまったためか今も先生との距離感を感じる。友達も作れず、誰も知らない状況で授業を受け始めた。メールで?先生とのやり取りするの?という感じで戸惑った。未だに先生とはどこまで踏み込んで接していいの

か、わからない。そのような状況で、入学当初は先輩が運営するツイッターの相談箱をよく利用した。履修科目の相談など気軽に利用できた（２）

- ◆ まず、大学のどこに何があるか、先生がどこにいるのか分からなかった。情報の少なさに困った。アドバイザーが誰かもわからなかった（２）
- ◆ 始めは聞ける友達もいない。先生にも、対面になった今もなかなかコミュニケーションが取りづらい（２）
- ◆ 特にオンライン授業時は、何かを相談するということが環境的に難しかった（３）

<どうすれば相談しやすくなるか>

- ◆ 先生ではなく、学生アドバイザーの先輩がいると相談しやすい（２）
- ◆ オンラインでよいからアドバイザーの先生と顔をあわせてお話しする機会があれば、距離が縮まってもう少し相談しやすかったかもしれない（２）
- ◆ 授業欠席の連絡をどのようにしたらよいかわからなかった。フォーム（対面授業欠席届とおもわれる）提出後の対応が、担当教員によって異なり戸惑った。あらかじめ授業欠席の連絡方法を大学として提示してあればよいと思う（２）
- ◆ ツイッター等の SNS でラフに相談できるようなものが有ればよいと思う（２）
- ◆ オリエンテーションヘルパーをしており、遠隔にて先輩後輩で話しをする機会があった。また、Google Classroom にて教員側より学生の困りごとや様子を聞いてくださる機会もあった。この時、課題過多で困っていることを複数の学生が相談したところ、学科全体で課題を適切な量に抑えるよう調整してくださるという判断・改善につながったことがあった。教員側からの発信がもっとあるとうれしい（３）
- ◆ オフィシャルじゃないもののほうが学生は利用しやすいのでは？フ文学会はインスタを運営しているが、学生は学生の運営するもののほうが相談し易いかもしれない（４）
- ◆ 各学科に学会があるので、そこに相談できるような SNS 等を運営してくれるとよいと思う（４）
- ◆ SNS はアカウントが無いと使えない：誰でも使えるキャンパススクエアの相談フォームなどがあると良い（４）

<相談したいと思ったことのある内容>

➤ 履修相談

- ◆ 履修登録時に自分で組んだ時間割をチェックしてほしい。心配。
- ◆ 遠隔の時は一人で考えなくてはならず、友人に聞いても解決しなかった。
- ◆ 今年度春には履修相談会があり、先輩へ相談することができた。
- ◆ 履修登録画面に不足単位数が表示されるようにしてほしい。

➤ セミナー（演習・ゼミ）選択相談

- ◆ セミナー選択にあたり、さらに詳細な情報が欲しい。
- ◆ 実際に履修されている先輩からの話もききたい。

- ◆ 先輩からの情報にも限りがあるため、すべてのゼミ情報がほしい。
- ◆ セミナー選択について、アドバイザーへ相談しようという発想はなかった。

テーマ②

➤ 授業形態

- ◆ 体調不良の際、オンラインだと助かる。電車が頻繁に遅延するため、後から動画視聴できると便利になる（2・4）
- ◆ プレゼン、語学、少人数などの授業は先生や友人とのつながりもあるので対面の方がよいが、講義型の場合はオンラインの方がよい（複数名）
- ◆ 科目の特性によって、対面授業とオンライン授業があったほうがよい（複数名）

➤ 授業ツール

- ◆ せっかく対面授業に出席しても「manaba courseで課題を提出して出席」とするのは避けていただきたい。対面授業に参加する意味がなくなってしまう（3）
- ◆ レスポンの機能を検討してほしい。欠席している人が友人からメールで番号を聞いてそれを入力する学生もいるため、対面授業に出席している学生にとっては、不公平になる（4）
- ◆ オンライン授業開始時、どの授業がどのツールを使用するのか、そのタイプを覚えるのが大変だった。使用しているツールがmanaba course、Campus Square、Google meet、Classroom、メール、スכולジー（お一人だけ）など使用方法がまちまちで大変。例えば、学科ごとに使用するツールが定まっているとよい。manaba courseはとても使いやすい（2）
- ◆ manaba folioと比較し、manaba courseではレポートを提出した際、通知が来ないのは不便（3）
- ◆ 先生がツールを使いこなせていないと感じる。先生にメールをしても返信が遅いことが多くて困る。（複数名）
- ◆ 授業内容については、後から確認もできるので資料はアップしてもらえると助かる。
- ◆ 対面授業では対面でしかできないことをしてほしい。（複数名）

2021年7月29日

FD推進委員会

FD 研修会「発達障害の理解と対応について」実施報告書

近年、「発達障害」の傾向を持つ学生の入学が増加しており、今年度ウェルネスセンターに支援を申請する学生の多くがその傾向を持っていた。そこで、このような学生の抱える困難を正しく理解し、適切な対応に繋げることを目的に、ウェルネスセンターと共催で、以下のような研修会を開催した。

日 時 : 2021年6月14日 (月) 16:30~18:00

方 法 : Zoom でのリモート配信

テ ー マ : 「発達障害の理解と対応について」

講 演 者 : 宮本 信也先生 (副学長・ウェルネスセンター長・発達心理学科 教授)

対 象 : 本学専任教員 (助教及び特別専任を含む)

※学生対応・サポートにあたるスタッフを対象とした SDとしても有用な内容であることから、職員 (専任及び非常勤を含む) 向けにはSDとして実施した。

講演内容 :

講師より、近年の発達障害の診断名の変更についての説明がなされ、続いて一般の大学生のなかに存在している知能障害を伴わない自閉スペクトラム症 (自閉症スペクトラム障害: Autism Spectrum Disorder, ASD) の行動特徴について、その症状特性に沿って詳細な紹介がなされた。ASD傾向の強い学生が抱える困難性の背景として、比喩的な言葉や暗喩の理解の困難があり、“そこに示されていない言葉や事柄を推測したり、想像したりすることが苦手”・“示された言葉・事柄だけで判断してしまう”・“言葉を自分が体験した範囲・理解した範囲でしか分かっていない”・“言葉の多義性が分かっていない”といった言語理解の問題があり、通じていると思っても通じていないこともあることに留意し、こちらが伝えたい内容が適切に伝わっているかどうか丁寧に確認しながら対応することが重要であることが指摘された。

次に注意欠如・多動症 (注意欠如・多動性障害: Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder, ADHD) の特徴について紹介がなされ、発達年齢に比べて不相応な不注意、多動性、衝動性が顕著であることがその症状の中心であるが、女性の場合は不注意が優勢で多動・衝動性は軽度であることが多いために、学習態度が悪いとだけみられがちで、ADHD症状に由来することに気付かれにくいことが指摘された。また、ASDとADHDとの併存があることにも留意が必要であり、判断に迷ったらとりあえず、両方の特性があるものとして対応を考えるのがよいとの助言がなされた。

これらの発達障害傾向の強い学生に対しては、“省略をしない完全な文章で話す”・“主語と目的語をつける”・“具体的用語・表現を用いる”“冗談は控える”・“皮肉は言わない”・“代名詞は使わないか、指示する名詞を付けて使う”・“「それ」ではなく「そのコップ」・「この前」ではなく「先週の水曜日、9月21日」など具体的に話す”といった言葉かけでの配慮が有効であり、また、“命令形や大声を避け、肯定的表現で話す”・“だめ、違う、変だ、おかしいといった否定的な表現は使わない”・“「間違ってる」ではなく、「そこをこんな風にしてみたらいい」など穏やかに丁寧に話す（「ですます調」で話すのもよい）”・“当たり前に見えることでも丁寧に繰り返して説明する”などの指導上の具体的な工夫についても説明があった。最後に、発達障害傾向の強い学生は、学生生活のなかで適応に困難を抱え、情緒の不安定さや行動上の問題、心身の不調を来していることも多く、周囲の理解と支援が必要であることが強調され、講演が終了した。時間の関係で説明は割愛されたが、参考資料として成人期のASDおよびADHDの状態像に関するスライドも提示され、職場での理解や支援に役立つ情報が提供された。

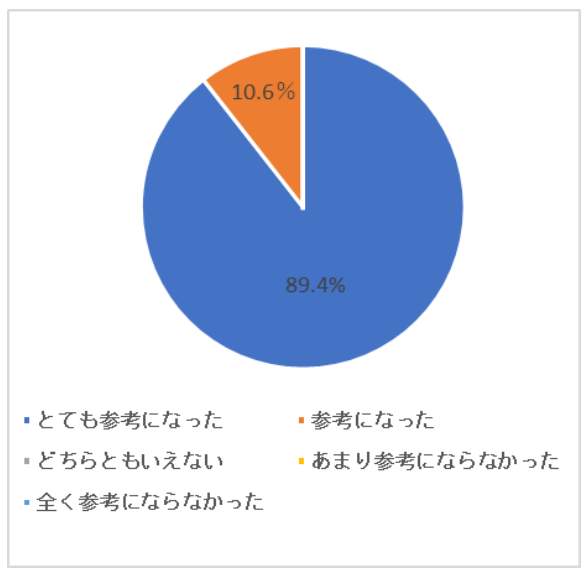
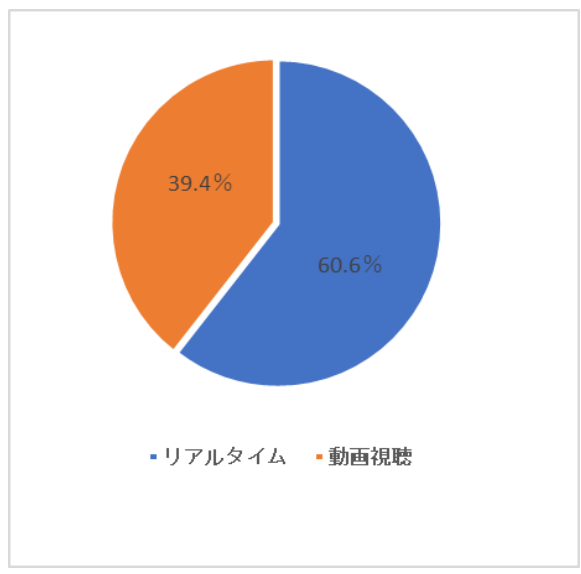
参加者アンケート集計結果（回答数180人） ※7月9日集計時点

① 参加人数：専任教員80名（参加率100%）

※2021年5月1日在籍の専任教員85名のうちサバティカル、休職等を除く80名が集計対象
 （参考）職員100名（専任52名，非常勤48名） 教職員合計180名

② 参加形態：リアルタイム109名，動画視聴71名

③ 研修会の内容：とても参考になった161名
 参考になった19名



④ 今回の研修についての意見・感想

<主な内容>

- 感謝の言葉
- 発達障害そのものや特性傾向をもつ学生に対する理解が深まった。
- 今日の学生指導や大学運営に必須の内容だった。
- 具体的な対応や支援のしかたについて学ぶところが大きく、役に立つ貴重で素晴らしい講演だった。
- 発達障害や特性傾向を持つ学生を適切に支援するための新たなシステム（教員とカウンセラーとの連携が可能な新しいアドバイザー制度等）の構築が必要だと感じた。
- どういったかたちで学生サポートが実現できるのか、踏み込んで話し合う機会が必要だと感じた。
- 学内での支援例をもとにしたさらなる研修会が開催されるとよいのではないか。
- 一般の対人関係やふだんの学生指導や留学生への対応にも活かせる内容だった。
- ぜひ続編のご講義をお願いしたい。

<意見>

- *この録画は非常勤の先生方にお見せすることはできないのでしょうか。きっと役に立つと思います。
- *今後、2年に一回など、定期的にこのテーマの研修会は行っていくのがよいと思います。
- *機会がありましたら「織細さん(HSP)」についてもどのように対応したら良いのか、お話を伺いたいです。
- *健康安全(緊急対応)やハラスメントなどに関しても研修の機会を設けていただけるとたいへんありがたく思います。
- *学生相談室では実際にASDやADHDと思われる学生からの相談があるのか、あるならどのような相談があるのかなども聞いてみたいです。
- *配慮が必要な学生・配慮を求めている学生に関して、本日お話しいただいたことが多々当てはまり、支援にも役立てられると思いながら聴いておりました。大学として、配慮申請から各科目での対応までの流れを、全学生に向けても教職員に向けても、明示していただけると大変有難いです。